

2014年3月16日

佐村河内氏関連番組・調査報告書

日本放送協会

はじめに

全聾の作曲家として知られていた佐村河内守（さむらごうち・まもる）氏について、NHKはこれまで、「NHKスペシャル」などの番組やニュースで取り上げてきた。しかし、本人が作曲していないことや、全聾ではなかったことに気づくことができなかった。

なぜこうした事態を防げなかったのか。NHKは、再発防止の観点から、調査チームを設け、佐村河内氏を最初に取り上げた「情報LIVE ただいま!」と、「NHKスペシャル」について、提案から放送に至るまでの経緯を調査した。調査では、制作にあたったディレクターやプロデューサー、カメラマンなどのほか、佐村河内氏や外部の関係者からも聞き取りを行った。また、当時の取材メモなどの資料も調べた。

1. 発覚の経緯

2014年2月2日、佐村河内守氏に関して、疑惑を指摘する情報がNHKに寄せられ、事実確認の調査を始めた。4日、佐村河内氏の自宅で本人に面会して質したところ、18年前から自分では作曲しておらず、桐朋学園大学非常勤講師・新垣隆（にいがき・たかし）氏に依頼していたことを認めた。翌5日朝の「おはよう日本」で放送することを決め、準備を進めていたところ、佐村河内氏は、5日未明、弁護士を通じて、別の人物に作曲させていたことを認める文書を報道機関にFAXで送付し、事実を公表した。

2. 訂正とお詫び

5日朝の「おはよう日本」7時台の2項目めのニュース（トップ項目は大雪関連）で、佐村河内氏が別の人物に曲を作らせていたことを伝えた。続いてスタジオのキャスターが次のように訂正とお詫びをした。

「NHKはこれまで、NHKスペシャルなどの番組やニュースで佐村河内氏を取り上げました。取材や制作の過程で、検討やチェックを行いました。本人が作曲していないことに気づくことができませんでした。視聴者の皆様や、番組の取材で協力していただいた方々などに、深くお詫びいたします。」

同日の「あさいち」と「ニュースウオッチ9」の中でも訂正とお詫びを行った。2月9日放送の広報番組「とっておきサンデー」では、「情報LIVE ただいま!」、「あさいち」、「NHKスペシャル」、「佐村河内守 魂の旋律 交響曲第1番“HIROSHIMA”」、「ニュースウオッチ9」、「サンデースポーツ」の番組タイトルを改めて紹介し、訂正とお詫びをした。「関西発ラジオ深夜便」についても、2月8日に訂正とお詫びを行った。NHKオンデマンドで配信していた「NHKスペシャル」など2番組については、5日までに配信を停止した。

視聴者からは、5日から12日までの1週間だけで、厳しい内容を中心に700件あまりの意見が寄せられた。

3. ご出演、ご協力いただいた方々への対応

NHKスペシャルで佐村河内氏との交流を描いた被災地の少女とそのご家族をはじめ、番組にご出演、ご協力をいただいた方々に、番組を制作した制作局 生活・食料番組部の部長や番組責任者らが、直接お会いするなどして経緯を説明し、お詫びをした。

4. 番組で取り上げるまでの経緯、および番組の概要

NHKが佐村河内氏を初めて取り上げた番組は、2012年11月9日放送の「情報LIVE ただいま!」である。佐村河内氏については、すでにこの時期までに、著名な作曲家や評論家はその音楽性を高く評価していたほか、米TIME誌が、“現代のベートーベン”と評するなど、国内外のメディアが取り上げ、「全豊の作曲家」として知られるようになっていた。番組では、「交響曲第1番“HIROSHIMA”」が生まれた経緯や佐村河内氏の半生などを紹介した。

放送後、視聴者から大きな反響が寄せられたこともあり、「NHKスペシャル」で佐村河内氏を取り上げることとなった。「交響曲第1番“HIROSHIMA”」が、東日本大震災の被災地で、勇気を与える曲として共感を呼び、CDの売上が7万枚に達するなど、社会現象ともいえる状況になっていることを伝えるとともに、新曲「ピアノのためのレクイエム」の演奏会を被災地で開くまでを描き、2013年3月31日に放送した。

5. 番組のチェック体制

NHKスペシャルでは、制作局、報道局などから各部局のプロデューサーや責任者などが集まり、3段階の提案会議を経て、提案が正式に採択される（「情報LIVE ただいま!」は、制作局内の3段階の提案会議で審議される）。

これらの会議では、番組内容の審議とともに、疑問点や課題が議論され、事実関係についてもチェックが行われる。

また、編集・試写の段階では、NHKスペシャル事務局や制作部局の部長らが集まり、その都度内容のチェックを行い、疑問点や課題を解決するしくみになっている。

この番組も、上記の審議とチェックを経て制作・放送された。制作にあたっては、提案者である契約ディレクターに、職員ディレクターを加えて2名としたほか、制作を統括するプロデューサーも2名とし、体制を強化した。

6. なぜ気づくことができなかったのか

(1) 本人が作曲していなかったことについて

●佐村河内氏は、番組の提案が出された段階で、すでに著名な音楽家、評論家から高い評価を受けていたが、音楽性に対する評価を改めて確かめるため、クラシック音楽番組の担当者が専門家に取材を行った。クラシック音楽界における佐村河内氏の評価は分かれているとのことであったが、本人が作曲していないのではないかと疑わせるような情報はなかった。

a) 「記譜シーン」

●耳が聞こえない佐村河内氏が、どうやって作曲するのかを描くためには、譜面を書くシーンの撮影が重要だと考えられていた。プロデューサーからの指示もあり、ディレクターは再三記譜シーンの撮影を交渉したが、佐村河内氏から「譜面を書くのは神聖な作業である」として、拒否され続けた。ロケの後半、「ピアノのためのレクイエム」が完成する日、撮影にあたったカメラマンは、どうしても記譜シーンを撮りたいと考え、音楽室に入ろうとした佐村河内氏に対し、「最後まで撮影させてほしい。少しでもいいから撮らせてほしい」と申し出たが、結局拒否された。撮影スタッフはいったん佐村河内氏の自宅を離れ、12時間後再び訪れた。音楽室に入室を許可されると、音符が書き込まれている楽譜が机の上に置かれていた。

記譜シーンが撮影できなかったことについては、ロケにあたったディレクターがプロデューサーに連絡した。プロデューサーは、これ以上交渉すると関係が悪化して放送が難しくなる恐れがあったことや、芸術家や作家の取材では創作現場を撮影できないことも少なくないことから、記譜シーンの撮影を断念したスタッフの判断を了承した。

●NHKが2014年3月10日に、改めて佐村河内氏からの聞き取り調査を行ったところ、「ピアノのためのレクイエム」が完成したとされる2013年2月19日の前日、新垣隆氏に依頼した楽譜が宅配便で自宅に届き、それを撮影に備えて音楽室にある机の引き出しの中に入れ、撮影当日、一晩かけて書き上げたかのように見せかけた、という。

撮影スタッフの一人は、「完成した譜面の音符は丁寧な丸みのある字体で書かれていた。楽譜の表紙にサインした名前は文字が角張っていたので、今思えば、ちょっと違う感じがした。しかし、別人が書いたとは思ってもよらなかった。」と話している。

b) 「全体構成図」

●記譜シーンは撮影できなかったが、それに代わるものとして、ロケの最中に「ピアノのためのレクイエム」の「全体構成図」を撮影している。この図が、「本人が作曲している」と撮影スタッフが疑わなかった理由の一つである。

曲が完成する前、佐村河内氏の自宅で、「現段階の曲のイメージを教えてください」とディレクターが頼んだところ、佐村河内氏はカメラの前で、一枚の紙の上に線を引き、曲の全体構成をスラスラと書き始めた。そこには「序奏」「主題バロック」「変奏バロック」「アレグロ」「ロマン的」「長調、短調」「超絶技巧」など、曲の全体像が示されており、これを見たディレクターは、「これだけ具体的なイメージがあるのだから、本人が作曲しているに違いない」と感じたという。完成した曲は、ほぼ、この時書かれた「全体構成図」の通りになっていた。

(2) 聴力について

●提案審議の過程において、「耳が聞こえないのに、どのようにして作曲しているのか」という質問がたびたび出された。しかし、佐村河内氏の聴力そのものに関しては、耳が聞こえないとの医師の診断書と、「聴覚障害」(2級)の障害者手帳を確認していたので、それ以上疑問の声は出なかった。

●撮影段階では、佐村河内氏とのやり取りは、ほとんどすべての場合、手話通訳者を介して行われたため、耳が聞こえないことを疑うスタッフは一人もいなかった。

新たに加わった職員ディレクターによると、佐村河内氏はとても流暢に話すので、最初は、「耳が聞こえないのに、あんなに話せるものなのか」と思ったが、手話通訳の人から、中途失聴者はこれくらい話せると聞いたので、「そうなのか」と納得していた。

このディレクターが「本当に耳が聞こえない」と思ったのは、新幹線での移動中、通路を挟んで席が隣同士になったときだった。手話通訳を介して会話をしている途中でトンネルに入り、ゴーッという音で声が聞き取りにくくなったが、それでも佐村河内氏は同じ声の大きさを話し続けていたからだ、と話している。

また、契約ディレクターが、石巻市の被災現場で「今日、どんなことを感じたか」をインタビューした際、佐村河内氏は車道に背を向けていたが、車が近くを走っても気づかなかった。ところがその後、車が視界に入ったらしく、突然驚いた素振りでインタビューをさえぎり、「(耳が)聞こえないので、車が急に来る感じがする」と言った。このときの様子は撮影素材に残っている。

さらに、編集・試写段階において、全ての撮影素材を見た映像編集の担当者は「耳が聞こえるかもしれない、と思うようなカットは、ワンカットもなかった」と述べている。

●撮影スタッフの一人は、佐村河内氏が、テレビのスピーカーに指をあてて「音の強弱が分かる」と言って説明した場面や、石巻でのコンサートのあとピアニストに演奏についての感想を言う場面を目にして、「不思議に思った」と言うが、「特別な感性を持っている人にはわかるのかな」と、それ以上疑うことはなかったと話している。

●佐村河内氏は、記者会見（2014年3月7日）で、自ら聴力検査の結果を明らかにした。それによると、「聴覚障害」（2級）には該当しないことがわかった。本人は、「音がするのはわかるが、言葉としては聞き取れないレベル（言葉が歪んで聞こえる）」「耳元でゆっくりはっきり話してもらえれば、わかる時もある」という。また、3年ほど前から聴力は少しずつ回復してきているが、手話通訳がなければ、今も生活に支障があると話している。

(3) 3月10日の聞き取りで佐村河内氏が語ったこと

●NHKスペシャルでは、佐村河内氏への取材を元にナレーション台本を作ったが、その中で、別人が作曲していた、全豊ではなかった、という点のほかに、「事実と異なる部分はないか」と、本人に質した。

a) 「音楽的経歴」について

- ・幼い頃からピアノやバイオリンの英才教育を受け、交響曲の作曲家になる夢を抱いていた、という事実はなく、ピアノの赤バイエルと黄バイエルを4年練習した程度であり、交響曲の作曲家になる夢までは描いていない、と話した。

b) 「創作ノート」について

- ・かつて思い浮かんだメロディーなどを書きためたとされる創作ノートについて、新垣氏に作らせた曲を手書きで写したもので、将来、自分が作曲したという証拠にするためにねつ造した、と話した。

c) 「どのように作曲するのか」について

- ・音が聞こえない中での作曲を可能にしたのが絶対音感であり、頭の中のノイズの中から旋律が浮かんでくる、と説明していたが、絶対音感はなく、ノイズはあるものの、旋律は降りてこない、と語った。

なお、本人が激しい耳鳴りで苦しむ場面や、それを避けるために部屋を暗くしている場面については、実際にそうした症状があると本人は語っている。

7. 今回の問題に関する報道について

●今回の問題をめぐっては様々な報道がされている。このうち、「情報LIVE ただいま!」と「NHKスペシャル」を担当した契約ディレクターに関し、あたかも佐村河内氏の虚偽を知っていたかのような報道があるが、本人は全面的に否定している。撮影で行動をともにした他のスタッフからのヒアリングでも、そのような事実は認められない。

●この契約ディレクターは、今回の問題が表面化する前、週刊誌の取材を受け、佐村河内氏にメールで問い合わせた。佐村河内氏からは、「自分はシロだ」と疑惑を否定する返信があったが、2月2日、一転して、別の人物に作曲させていたことを認めるメールが送られてきた。この中で、「償いきれないほどの裏切りをした」と契約ディレクターに謝罪している。

また、佐村河内氏は、NHKが2月4日に面会（筆談）した際、「彼（契約ディレクター）は、ゴーストのことはまったく知らない。それは事実です。やらせとか、知っていたなどということは絶対ないです」と述べた。さらに3月7日の会見でも「Nスペでゴーストライターとの関係を知っている人はいない。明らかに私がディレクターたちをだました」と発言している。

●佐村河内氏との交流を描いた被災地の少女について、複数の週刊誌が「NHKのスタッフが探し出し、佐村河内氏に引き合わせた」との記事を掲載しているが、そのような事実はない。佐村河内氏が知人を通じて被災地のピアノ教室に連絡を取り、紹介を受けたもので、その過程にNHKのスタッフは関与していない。佐村河内氏から、少女のことを聞かされたのは後日のことである。

佐村河内氏本人への聞き取りでも、「私が知人にメールし、少女を探すように頼んだ。インターネットで検索して被災地のピアノ教室を探し、そこから見つけた。NHKは一切関わっていない」と発言している。

●佐村河内氏が「曲を完成させた日」について、あらかじめNHKとの間で設定されていたかのような記事が一部週刊誌に掲載されているが、そのような事実はない。佐村河内氏が、曲を演奏してくれることになったピアニストと、レコード会社の関係者を通じてやりとりした結果、ピアニストから求めのあった練習に要する日数を演奏会の日から逆算して、佐村河内氏自身が設定したものである。

●NHKスペシャルが、「フリーランスの持ち込み企画であった」との指摘があるが、これも事実ではない。提案者の契約ディレクターは、当時、NHKが番組制作業務を委託していたディレクターである（契約期間は2010年4月～2013年12月）。このディレクターは、日頃から職員のディレクターと同じ職場で仕事をし、自分の企画を提案する場合も、職員と同様の審議を経て採択される仕組みになっている。今回のNHKスペシャルの提案に関しても同様である。

8. 再発防止に向けて

今回の問題に関して、NHKには視聴者から極めて厳しい意見が寄せられた。番組制作にあたり、企画から放送までのそれぞれの段階でチェックと検討を重ねてきたが、別の人物が作曲していたことや、全聾ではなかったことに気づくことができなかった。番組制作者として深刻に受け止めている。

佐村河内氏に関しては、そもそも、別の人物が作曲しているかもしれない、という想定はまったく持っておらず、疑念を抱かせるような情報も入っていなかった。作曲するときの「記譜シーン」の撮影は、耳の聞こえない人がどうやって作曲するのかを描くねらいであって、本人が作曲していることの証拠を得ることを目的とするものではなかったため、番組制作の段階では、そのシーンが不可欠であるという判断は難しかったと考える。しかし、結果として虚偽を見抜けなかったことは、今後のこうした取材をする場合の教訓として制作現場で共有しなければならない。

聴覚障害については、通常行わない障害者手帳や医師の診断書の確認までしていた。取材の現場では、佐村河内氏の障害を裏付けるような場面に多く遭遇したことや、人道上の観点から、それ以上の確認作業は行わなかった。

佐村河内氏の「音楽的経歴」については、両親への取材を申し入れたが、拒否された。友人にも話を聞いたが、佐村河内氏の経歴を疑わせる発言はなかった。もっと取材範囲を広げて裏付け取材を行えば、経歴が虚偽であったことを見抜けたかもしれない。

社会的に一定の評価が定着している人物を番組で取り上げるとき、その経歴や評価についてどこまで確認をとるべきなのか、番組制作の教訓として重くとらえている。

以上のように、番組を制作した時点では、当時必要と思われた検討や確認は行ってきたと考えるが、結果として、事実とは異なる内容を放送したことを真摯に受け止め、反省しなければならない。

これからは、今回のようなケースもありうることを、制作現場のすべての職員・スタッフがしっかりと認識し、取材から放送に至るまでのあらゆる過程で、真偽を見極めるチェックの精度を高めていく必要がある。NHKは、今回の問題を、様々な研修会や勉強会で取り上げ、再発防止の取り組みを進めていく。

NHKで佐村河内氏を取り上げた番組の一覧

【テレビ】

○「情報LIVE ただいま!」(総合22:00~22:48) ※すでに番組終了

放送日：2012年11月9日(金)

企画：22:20~22:48

時間：28分間

内容：両耳の聴力を失いながら交響曲の創作にあたったとされた佐村河内守氏の「交響曲第1番“HIROSHIMA”」を紹介。2012年10月に大阪で行われたコンサートの様子のほか、交響曲が生まれた経緯などを紹介。音楽業界での評価やネットでの反響についても紹介。19分間のVTRの後、スタジオでゲストが感想を語る。

○「あさいち」(総合8:15~9:54) ※3回放送

1. 放送日：2012年12月12日(水)

企画：9:06~9:31

時間：25分間

内容：「情報LIVE ただいま!」の放送後の反響をまとめたVTRと佐村河内氏を紹介するVTRを見たあと、スタジオでゲストが感想を語る。

2. 放送日：2013年5月1日(水)

企画：9:05~9:26

時間：21分間

内容：3月31日放送のNHKスペシャル「魂の旋律」でも紹介したレクイエムの創作過程を中心に構成。VTRを受け、スタジオで感想を語る。

3. 放送日：2013年12月27日(金)

企画：9:30~9:45

時間：15分間

内容：NHKスペシャルの一部分を紹介し、佐村河内氏や「交響曲第1番“HIROSHIMA”」をVTRで紹介。スタジオでは、「バイオリンのためのソナチネ」の演奏に合わせて、華道家が花と音楽のコラボレーションを披露。

○NHKスペシャル「魂の旋律～音を失った作曲家～」(総合 21:00～21:49)

放送日：2013年3月31日(日)

時間：49分間(全てVTR)

内容：両耳の聴力を失いながら交響曲の創作にあたったとされた佐村河内守氏を取材。「交響曲第1番“HIROSHIMA”」が東日本大震災以降、注目を集め、クラシックとしては異例のヒットを記録していることなどを紹介。専門家による音楽的な評価も伝えた。番組の後半では、新曲「ピアノのためのレクイエム」の演奏会を被災地で開くまでの活動を紹介した。

○コンサート「佐村河内守 魂の旋律 交響曲第1番“HIROSHIMA”」
(Eテレ 15:00～16:20)

放送日：2013年4月27日(土)

時間：80分間

内容：日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートを放送。曲は「交響曲第1番“HIROSHIMA”」。番組内で佐村河内氏をVTRで約2分間紹介。

○「ニュースウオッチ9」(総合 21:00～22:00)

放送日：2013年6月13日(木)

企画：21:29～21:41

時間：12分間

内容：キャスターによる佐村河内氏本人へのインタビューを中心に構成。発表された新曲「ピアノ・ソナタ第2番」への思いなどを聞いた。また、インタビューの間に、聴力を失いながら楽曲を作り続けてきたとされた佐村河内氏の活動などをVTRで紹介した。

○「サンデースポーツ」(総合 22:00～22:49) ※10分遅れの開始

放送日：2013年10月13日(日)

企画：22:28～22:40

時間：12分間

内容：男子フィギュア高橋大輔選手を特集。ショートプログラムに選んだ曲が佐村河内氏作曲とされていた「バイオリンのためのソナチネ」。この曲に合わせた練習の様子を取材するとともに、高橋選手に曲への思いなどをインタビュー。また、アイスショーに訪れた佐村河内氏と高橋選手との対面の場面などを伝えた。

【ラジオ】

○「関西発ラジオ深夜便」(R 1・FM 23:20～5:00) ※全国放送

放送日：2013年8月24日(土)

曲紹介：2:16～2:38

時間：22分間

内容：最近話題のインストゥルメンタルとして紹介した曲の一つとして、「交響曲第1番“HIROSHIMA”」の第1楽章のみを放送。
曲の後に、CDの解説文を引用する形で、佐村河内氏のプロフィールを1分50秒ほど紹介した。